Empfindnis 概念小史

杉山卓史

一　はじめに

「美学（aesthetics）」はここ半世紀弱、「感性（αἴσθησις）」という原義に立ち返って「感性的認識の学」として自らを再規定し、美にも芸術にも還元されない主題（たとえば「日常的なもの」）における感性のはたらきを分析・考察しようとしてきた。こうした動きは、しばしば「感性論的転回（aesthetic/aisthetic turn）」とも呼ばれ、[1] 日本でもaestheticsに「美学」ではなく「感性学」「感性論」という語を充てるケースが増えてきている。本稿は、こうした動向に掉さしつつ、「感性」にかかわるある概念に歴史的側面から検討を加えるものである。それは、Empfindnisという概念である。

二　フッサール[2]

Empfindnisは、現在日本で発行されている独和辞典のいずれにも載っておらず、「感覚（Empfindung）」にかかわる事態を表す語であるという推測はつくものの、なじみのない語であると思われる[3]（ちなみに“-nis”という接尾語は「動詞・形容詞などにつけて『行為・状態』や『（行為・状態の内容・結果としての）事物・場所』などを意味

する中性名詞または女性名詞をつくる」[4]ものであり、英語の“-ness”に相当する）。この語に多少なりともなじみがあるとすれば、それは現象学者とりわけフッサール研究者であろう。フッサールはこの語を、いずれも遺稿となった『イデーン』第Ⅱ・第Ⅲ巻および『間主観性の現象学』の重要な局面において、たびたび用いている。そして（興味深いことに）、それ以外の著作・草稿では（たとえば、「間主観性」という主題を共有する『デカルト的省察』などでも）まったく用いていない。既存の邦訳では「再帰的感覚」「感受状態」「感覚態」などと訳されており、定訳というものは存在しない。[5]本稿でも原語のまま提示し、まずは『イデーン』第Ⅱ巻に即してその所論をたどっていきたい。

『イデーン』第Ⅰ巻で明証的意識を獲得するために意識の超越論的性格を明るみに出したフッサールは、第Ⅱ巻ではそれが経験科学にどのようにかかわっていくのかを、「物質的自然」、「有心的（animalisch）自然」そして「精神世界」それぞれの「構成」を通じて、論じていく。このうちの「有心的自然」（狭義には人間）は、彼によれば、「局在化された感覚の担い手としての身体」を通じて構成されるが、この「局在化された感覚」こそがEmpfindnis[6]と呼ばれるのである（Hua, IV 144）。彼は、右手で左手にふれるという例に即して、次のように述べる。

> 左手をなでている時、私は触覚現象を得る、すなわち、私は感覚するのみならず知覚してもいて、柔らかくて、かくかくしかじかの形をした滑らかな手という現象を得るのである。それらを指し示す運動感覚や、それらを代理表象する触感覚は、「左手」という事物の特徴として客観化され、右手に属する。しかし、左手をなでている時、私は左手にも一連の触感覚を見出しており、それらは左手に「局在化されている」。（IV 144f.）

右手で左手にふれるという場合、両者の関係は単に〈感覚する主体 - 感覚される客体〉ではない。ふれられている

左手の方にも「ふれられている」という感覚（たとえば「くすぐったい」）があり、それは右手に触れられた部分に「局在化」しているのである。このことは、「感覚する主体」であるはずの右手にも変化を引き起こす。右手は、左手を対象として知覚すると同時に、その質感（柔らかい、滑らかな、等）をも受け取るのである（圧迫などによって一時的に麻痺した手足を別の手足で触ると、まるで異なるもののように感じられる経験も、このことを裏づけていよう）。ここには「触れていると同時に触れられている」という二重性が生じている（ちなみに、この洞察を最も実り豊かに発展させたのが、ルーヴァンに開設された直後のフッサール文庫を訪れて『イデーン』第Ⅱ巻の草稿をいち早く目にしたメルロ＝ポンティであった）。

このように、第一に局在化、第二に二重性という契機によって、Empfindnisは特徴づけられる。そして、フッサールはこれを、身体を通じた構成一般へと拡張する。さらに、こうした身体を「意志の器官」すなわち「私の純粋自我が直接自発的に動かすことができる唯一の客体にして他の事物を間接自発的に動かすための手段」(151f.)とし、Empfindnisという局在化・二重化された独特の感覚をもつ身体だからこそ自由意志を行使しうるのだ、と主張する。しかし、ここから精神世界の構成へと向かう前に、テクストは（本稿にとっては）興味深い「脱線」を見せる。すなわち、「直接的直観に与えられた局在化と、それに基づく身体の関係には、感性的な事物すなわち空間に現象する客体の構成にとって構成的な機能を持つ感性的感覚のみならず、まったく別のグループの感覚もある」(152) というのである。それは、たとえば「快と苦痛の感覚、全身を流れて感じる爽快さ、『身体の不調』という一般的不快感」(ibid.) であり、「こうした感覚のグループはみな、Empfindnisとしての直接身体的な局在化をもっている」(153) とされる。Empfindnisには、中立的な局在化・二重化感覚のみならず、価値判断を伴う快苦の感覚さらには喜怒哀楽の感情も含まれ、身体のこうした「感情的」な側面も経験世界の構成にとっては重要である、というわけである（ここに後期の「生活世界」論の萌芽的側面を看取できよう）。「感情的」な側面、これがEmpfind-

nisの第三の契機である。

最後に第四の契機として、「感情移入（Einfühlung）」、さらには、それによって構成される間主観性を挙げることができる。もともとフッサールは、以上のような身体を通じた有心的自然の構成を「独我論的（solipsistisch）な考察でどこまで行けるか、まずは試してみよう」（144）と開始していた。それ自体はすぐに行き詰まるのだが、それを打破する鍵はEmpfindnis概念においてすでに与えられている。すなわち、右手は左手にふれると同時に左手からふれられてもいて局在化されているという事態は、単に私一人の身体内に限定されるものではなく、他（者）の身体にも置き移しうるのである。

したがって私が私の物理的環世界において見出す身体はいずれも、独我論的経験において構成される物質的な事物としての「私の身体」と同じ型の物質的な事物であり、私はそれらを身体として把握する、すなわち、私は身体にその都度自我主観を感情移入する……。その際、私は何よりもまず、（触覚、温覚、冷覚、嗅覚、味覚、痛覚、感性的快感などの）さまざまな感覚野と（運動感覚などの）感官領域で行っている「局在化」を、他者の身体に転移する。（164）[7]

こうしてEmpfindnis概念は、後期フッサールのもう一つの主題である間主観性の問題に足場を提供することになる。

しかし、フッサールはEmpfindnis概念をめぐる本稿の「主役」ではない。前に彼の既存の邦訳における定訳の不在に言及したが、邦訳者たちは、このなじみのない語を日本語に置き換える上でそれぞれ工夫を凝らした――時に先行訳を批判しつつ――ことを訳注に記している。そのような記述は、この概念があたかもフッサール独自の新

造語であるかのような印象を与える。しかし、それは誤りである。すでに一八世紀に、何人かの思想家たちがこの語を用いて自らの思考をそれぞれに紡いでいったのである。本稿の目的は、その布置を描き出すことにある。以下では、この語が最も盛んに用いられた一七六〇年代から七〇年代に時期を限定し、新しいものから古いものへと時代を遡って用例を検討していく。

三　テーテンス

テーテンスは、一七八九年、五三歳にしてキール大学の自然哲学正教授職を辞してデンマークの財務官僚に転身し、哲学研究の第一線から退いたこともあり、今日ではほとんど忘れ去られた哲学者であるかもしれないが、「彼の前にはいつもテーテンスが広げられています」とハーマンが一七七九年五月一七日付ヘルダー宛書簡において証言しているように（Hamann 1955–79, IV 81）、全二巻計一六一八頁にもなるその主著『人間本性とその展開についての哲学的試論』（一七七七年、以下『試論』）はカントの『純粋理性批判』の成立に大きな影響を及ぼした。その影響を具体的に明らかにしようとする「テーテンス・ルネサンス」が近年進行中であるが、[8] 現時点ではその対象は理論哲学にとどまっているように思われる。また、同書はカントの心的能力の三分法、とりわけ、快および不快の感情がアプリオリな原理を有するという洞察（これによって『判断力批判』は成立した）に影響を与えたとされるが、それは具体的にはいかにしてか、そもそも、この見方は正しいのか。

たしかに、『試論』第一巻末尾近くでテーテンスは「私は魂の根本能力を三つ数える。感触（Gefühl）、知性、そして、その活動性である」とし、「活動性」を「意志」とも呼んでいる（PhV, I 625）。[9] しかし、その直後に「目下の意図に最適であるがゆえに採用したこの区分に、観察によって与えられる以上の現実性を帰すつもりはない」と断っている（ibid.）。[10] たしかに、「観察」はテーテンスがロックにならって「人間の本性とその展開」を解明するの

に採用した方法である（それゆえ「ドイツのロック」とも呼ばれる）[11]が、彼はその限界をもわきまえていた（cf. PhV, I 469）。したがって、この区分はあくまで暫定的なものであって絶対視すべきではない。このことは、第一巻の目次を概観すれば明らかである。

第一試論　「表象の本性について」
第二試論　「感触について、感覚とEmpfindnisについて」
第三試論　「知覚と意識について」
第四試論　「思考力と思考について」
第五試論　「事物の客観的実在についてのわれわれの認識の起源について」
第六試論　「感性的認識と理性的認識の相違について」
第七試論　「普遍的理性真理とその本性ならびに根拠の必然性について」
第八試論　「推論する理性の高次の認識と普通の人間知性の認識との関係について」
第九試論　「感覚、表象そして思考の根本原理について」
第十試論　「表象力とその他の活動する魂の能力との関係について」
第十一試論　「人間の魂の根本力と人間性の特性について」

と並んでいる。これは、下位から上位の能力へと連続的に移行するヴォルフ的な認識能力論をそのまま踏襲したものである。[12]これをロック的な「観察」という方法によって考察し、さらに後述するフランス感覚主義の成果を取り入れて、「感触」という下位認識能力に独自のステイタスを（バウムガルテンとは別の仕方で）与えるという折衷的な立場を、『試論』は取っている。

では、こうした下位認識能力、とりわけ、第二試論の表題に掲げられる三種の能力の関係を、テーテンスはどの

ように捉えているのか。結論から言えば、

感触 感覚 Empfindnis

という関係である。まず感触と感覚との関係については、感触が「単にわれわれにおける変化やわれわれへの印象が感じられるところのもの」であり、その際に「われわれは対象をこの印象によって認識することはない」のに対し、感覚は「われわれが感性的印象を介してわれわれの内で感触する、いわば、見出す対象を指し示すもの」である（PhV, I 167f.）。[13]「感触は感覚の対象というよりは、そのはたらきに向かう」（ibid.）のであり、「感触された変化が感覚である」（166f.）。要するに、感触は外的な何かによって自分の内部に何らかの物理的変化が引き起こされたことを、ただ受動的に、その内実を分節化することなく捉えるはたらきであり、それに対して感覚は、この変化を客観化・対象化したものである。[14]次に感覚とEmpfindnisとの関係については、「中立的（gleichgültig）でなく、触発してわれわれに気に入られるか気に入られないかする」ような感覚が「Empfindnisないし感動と呼ばれる」（ibid.）。要するに、肯定的であれ否定的であれ価値判断を伴った感覚がEmpfindnisであり、フッサールにおけるEmpfindnisの第三契機に相当する。なお、ここでテーテンスは「ボネ氏はEmpfindnisである感覚をsensationと呼んだ」（ibid.）と、フランスの感覚主義者ボネの『魂の能力についての分析的試論』（一七六〇年）を挙げているが、これは次節以降で見る思想家たちにも共通する着想源である。ちなみに、「感動（Rührung）」は原義は「動かすこと」であるが、文字通りに物理的に「動かすこと」（が自身の内に生じたことを捉えること）はすでに感触が担っているので、ここでは言うまでもなく比喩的な意味で「心動かすこと」の意である。

テーテンス自身が挙げる「太陽が肌を射刺す」という単純な例に即せば、こうである。私の外部にある何か（この時点では「太陽」という対象化はなされていない）が私の肌を射刺し、私の身体に変化が生じる。この変化を捉

えるのが感触である。この変化を生じさせたものを「太陽」として対象化し、事態を「太陽が肌を射刺す」こととして捉えるのが感覚である。さらに、この事態を（夏に）「暑く不快だ」と否定的に、あるいは、（冬に）「暖かく快適だ」と肯定的に評価するのが、Empfindnisである。

以上のようなテーテンスの下位認識能力論をカントの『判断力批判』と照合してみると、従来の通説とは異なって相違の方がむしろ際立って見える。同書においてカントが美的判断力の基礎に据えたのは、快または不快という価値判断を伴う「感情（Gefühl）」であり、テーテンスにおいてはEmpfindnisがおおよそこれに相当する。他方、テーテンスの「感触」は、以上に見たように、外的な何かによって自分の内部に何らかの物理的変化が引き起こされたことを、ただ受動的に、その内実を分節化することなく捉えるはたらきであり、カントの「感性」に近い。そもそも、テーテンスの「感触」は知性と意志の前に置かれたものであり、その点でも、認識能力と欲求能力との間に置かれて両者の媒介を期待されたカントの「感情」とは異なっている。『試論』は『純粋理性批判』には影響を与えたとは言えるが、『判断力批判』まではなお隔たりがある、と言うべきであろう。

四　エーベルハルト

エーベルハルトも、今日ではあまり聞かない名かもしれないが、カントが『純粋理性のすべての新しい批判は古い批判によって無用とされるべきである、という発見について』（一七九〇年、『純粋理性批判無用論』）において（『判断力批判』の公刊を遅らせてまで）再批判した相手である。また、『思考と感覚の一般理論』（一七七六年）は、プロイセン王立ベルリン学術アカデミーの懸賞課題への応募論文として執筆され、ヘルダーの『人間の魂の認識と感覚について』（一七七八年）らを押さえて一等入選を果たした著作である。同書においてエーベルハルトは、仏語のsensationとsentimentとの区分、すなわち、「外的感覚と身体の感触された完全性のみを把握する」能

力と「自らの外部にある対象において、ある種の性質と変化を完全ないし不完全と感触する」「感性的感覚から派生したもの」との区分に言及し、「若干のドイツの作家は、あえて前者に感覚という語を制限し後者をEmpfindnisという新たな語で表現した」と述べている（Eberhard 1776, 168f.）。「若干のドイツの作家」（これは次節以降で見るメンデルスゾーンやアプトであろう）を主語にしていることから明らかなように、エーベルハルト自身は基本的にはこうした用語法に与せず「感覚という語をたいていは最広義に用いる」と断っているが、「天才と性格の判定について」と題された最終第四節において「知的な天才の対象は、(1)思考、(2)Empfindnis、(3)行為である。第一の対象においては、天才は真偽を見る、すなわち、観想的哲学的であり、第二の対象においては快適なものと快適でないものを感覚する、すなわち、詩的であり、第三の対象においては有益なものと有害なものを推測する、すなわち、実務的である」という区分をしている（215f.）。アカデミーが回答を求める認識と感覚の関係について論じ終えた後の「補論」的な部分で、かつ、天才という限定されたトピックに即してではあるが、むしろエーベルハルトのEmpfindnis概念の方がテーテンスよりもカントの「第三の能力」に近いのではないだろうか。

五　メンデルスゾーン

むしろ、カントの心的能力の三分法に影響を与えた「本命」は、（あえて挙げるならば）[15]メンデルスゾーンであろう。同時に、彼こそが一八世紀におけるEmpfindnis概念の主たる担い手であった。

一七七六年六月に執筆されたと推定されるある遺稿は、次のように始まる。

> 認識能力と欲求能力との間には感覚能力があり、それによってわれわれは、事物において快ないし不快を感覚し、承認し、是認し、快適だと思う、あるいは、否認し、非難し、不快だと思ったりする。――われわれが関

与することのない、いかなるEmpfindnisとも結びつかない思考や表象が存在する。同様に、いまだいかなる欲求にもならないEmpfindnisも、存在する。われわれはある音楽やある絵画を美しいと思い、それに感動することがあるが、その際に何かを欲求しているわけではない。(JubA, III/1 276)

冒頭の一文――ここから現在では「認識能力、感覚能力そして欲求能力について」と題され知られている――から明らかなように、ここでメンデルスゾーンは認識能力と欲求能力との間に「事物において快ないし不快を感覚する」能力を置いている。「感覚」か「感情」かという用語上の相違はあるが、カントの心的能力の三分法すなわち三批判書の枠組とぴったり重なる。「われわれはある音楽やある絵画を美しいと思い、それに感動することがあるが、その際に何かを欲求しているわけではない」こと、すなわち、音楽や絵画の美しさを「感覚」することとそれをわがものとすることを「欲求」することとは異なる、という記述も、「関心なき満足」というカント的な美の規定に非常に近い。「本命」と呼ぶ所以である。

たしかに、このテクストは一八四四年の全集においてはじめて公になった「遺稿」であって、カントが知っていたなどということはありえない。しかし、公刊された『朝の時間あるいは神の現存在についての講義』(一七八五年)にも、次のような類似の記述が見られる。

人は通常、魂の能力を認識能力と欲求能力とに区分し、快および不快の感覚を欲求能力に数え入れてきた。だが思うに、認識と欲求との間には魂の是認、賛意そして満足があり、それは本来は欲求とはきわめて異なるものである。……以下、これを是認能力と呼び、真理の認識および善の要求から分離することにする。それはいわば、認識から欲求への移行であり、この両能力を結びつける。(III/2 61f.)

「感覚能力」という語は退き「是認（Billigung）能力」という語が用いられているが、「真理の認識および善の要求から分離」された、いわば「第三の」能力が「認識から欲求への移行」を司り、それによって「この両能力を結びつける」という発想は、『判断力批判』そのものとさえ言える。

ところで、この箇所では「感覚」とともにEmpfindnisという語も用いられている。テクスト全体（六〇〇語余り）では、前者が五回、[16]後者が六回用いられている。私見では、これらは草稿ということもあり、必ずしも厳密に使い分けられてはいないように思われる。[17]しかし、前の引用では、「われわれが関与することのない、いかなるEmpfindnisとも結びつかない思考や表象が存在する。同様に、いまだいかなる欲求にもならないEmpfindnisも、存在する」とされていた。このことは、裏返して肯定形で「いずれ欲求となり思考や表象と結びつくEmpfindnisが存在する」と言えるのではないだろうか。そして、そのようなEmpfindnisを捉えるのが感覚能力である、として、両者の間に差異を認めて読むことができるのではないだろうか。別の箇所では「Empfindnisは各々、対象の性質をわれわれの概念と調和させる欲求と結びついている」(JubA, III/1 277) とも言われている。このように、このテクストにおけるEmpfindnisは、認識と欲求の中間というよりは、欲求寄りに位置づけられている。もともとメンデルスゾーンは（少なくとも一七六〇年代までは）、認識と欲求の二能力論を採っていた。[18]それが一七七〇年代以降、両者の間にある「第三の能力」を認める方向に傾いていく。その端緒が、「いまだいかなる欲求にもならない」――現代風に言えば「無意識の」――Empfindnisの存在を認めることだった。そして、その次の段階として、これを捉える独立した能力を「感覚能力」ないし「是認能力」として設定する――このような筋書きが見えてくるのではないだろうか。バウムガルテンは下位認識能力に独自のステイタスを認めて「美学」を構想したが、メンデルスゾーンはそれに対して、あるいはそれと並行して、欲求能力を上位と下位に区分して後者に独自のステイタスを付与することによって、バウムガルテンとは別の形で美学を展開し、カントの『判断力批判』への途を拓いた、

と言えよう。[19]

そのためにはしかし、この一七七六年の段階でメンデルスゾーンの哲学的・学術的語彙の中にEmpfindnisという語が確固として含まれていることが前提となる。そのことを証するのが、一七七一年の改訂版『哲学著作集』に収められた「文芸における崇高なものと素朴なものについて」である。この論考は、最初は五八年に『芸術文庫』第二号に発表され、[20]次いで六一年に『哲学著作集』に収められて出版されたが、十分な編集作業ができなかったことに不満を抱いていたメンデルスゾーンは、大幅に改訂した版を七一年に出版する。そして、Empfindnisという語が現れるのは、この七一年の改訂版に限られる。すなわち、同じ主題をEmpfindnisという新語によって加筆修正した、本稿にとってきわめて興味深く重要な事例なのである。

このテクストでメンデルスゾーンがEmpfindnisという語を用いるのは、「素朴（naiv）なもの」を論じる文脈においてである。彼は、ヴィンケルマンの「高貴な単純さ」という概念を参照しつつ、「対象が高貴だ、美しい、あるいは重要な帰結をともなっていると考えられ、［それが］単純な記号によって暗示されているなら、その記号表示が素朴と呼ばれる」（JubA, I 215 = 485）と、いわば記号論的に規定する（これは、五八年の初出時以来の規定である）。要するに「ありのままのよさ」である。そして、ここからが七一年に加筆された議論であるが、これを顔立ちや表情そして身ぶりといった人間の外見に即して、いわば観相学的に次のように確認・補強する（ちなみに、観相学の祖ラヴァターが『観相学断片』を世に問うのは、この四年後である）。

> 人間の顔の特徴や表情そして身ぶりは、その傾向性や感覚の記号である。顔の特徴はみな傾向性を、表情はそれに対応する心の動きを意味する。それゆえ、それらがいわば、故意にでも声高にでも自意識過剰にでもなく傾向性とEmpfindnisの幸運で一致した体系を醸し出すならば、あらゆる特徴と身ぶりの総体に素朴なものの

性格が帰される。（488）

ここでのEmpfindnisは、テーテンスもEmpfindnisと同義に用いていた「心の動き」の換言である。これが「傾向性」と「故意にでも声高にでも自意識過剰にでもなく」一致した時、素朴という徳が現れる。このように、ここでのEmpfindnisは「傾向性」という広義の欲求能力と並行関係にあり、五年後の三能力論を用意していると言える。

六　造語の現場―メンデルスゾーンとアプト

実は、メンデルスゾーンはEmpfindnisという語の「共同造語者」の一人でもある。（哲学的概念としての）この語の初出は、夭逝した通俗哲学者アプト（Thomas Abbt, 1738–66）の『功績について』（一七六五年）であるが、彼は出版前に同書の草稿をメンデルスゾーンに送ってコメントを求めており、メンデルスゾーンは一七六四年八月末付で、その求めに応じて詳細なコメントを返信しているからである。草稿は現存していないが、メンデルスゾーンの返信はその内容についての有益な情報を含んでいる。

メンデルスゾーンはまず、「ドイツのサッポー」ことカルシュ（Anna Louisa Karsch, 1722–91）の頌詩（Ode）に即して、仏語のsensationとsentimentとの（テーテンスやエーベルハルトも言及していた）区分についての自らの理解を示す。それによれば、sensationは「場所や時間に結びついて」おり、これに「生き生きと感動させられる」ことが、作詩の発端である。これに対して、sentimentは「生き生きとした想像力の法則に結びついている」。頌詩は「sensationに由来する一連のsentiment」であり、「その端緒をsensationから取りうるが、sentiment以外の何ものにも従わない」（XII/1 58）。すなわち、空間的・時間的に発生した物理的sensationが生んだsentimentを表現したものが頌詩だ、というわけである。これは、当時としては標準的な頌詩理解であり、ここでは前者に「感覚」、後

者に「感情」ないし「感傷」という日本語が、それぞれ違和感なく収まるであろう。

問題は、この区分を独語に置き移す時に発生する。メンデルスゾーンは、「十分に生き生きとした感触（sensation）はみな、感覚（sentiment）をだめにして頌詩は突然終結せざるをえません」（ibid.）と述べ（主張自体は、物理的なsensationが強すぎると頌詩の素材であるsentimentがだめになってしまう、という単純なものである）、「感触（Gefühl）」とsensationとを、「感覚（Empfindung）」とsentimentとを、それぞれ対応させて（訳して）いる。その上で、アプトの草稿に対するコメント、とりわけ術語の問題という本題に入る。

私があなたにEmpfundという言葉を言わせようとしているのではないことは、お分かりでしょう。あなたはこれをempfundenという過去分詞から造語され、私は過去分詞から作られうる言葉としてはfundしか知らないでしょうが、その場合、動詞は決して名詞からは作られませんでした。感触は能力を意味しますが、FühlungとEmpfindnisがなお、この作用のために残っています。Empfindnisは奇妙に響きます。Fühlungは、探し出されるに値する古語ですので、われわれ（ニコライ氏と私はラムラー氏に問い合わせました）はこれをEmpfundの代わりにあなたに勧めました。ニコライ氏はあなたに、FühlungがsentimentよりもsensationにFühlungを、sentimentにEmpfindungを用いてよいでしょう、Empfundは不可能であり続けるでしょうから。（58f.）

メンデルスゾーンは、sentimentを「感覚」と訳すことについては問題視していない。問題は、sensationの訳である。文面を見る限り、アプトはEmpfundという語を用いたようである。これにメンデルスゾーンは、友人のニコ

ライおよび「ドイツのホラティウス」ことラムラー（Karl Wilhelm Ramler, 1725–98）とともに、異を唱えている。そして、代案としてFühlungとEmpfindnisという語を挙げるが、後者は「奇妙に響く」として斥ける（これは、独語を母語としないユダヤ人メンデルスゾーンならではの感覚なのかもしれない）。自ら斥けたとはいえ、アプトに先立ってEmpfindnisという語を挙げているのである。このことは、大いに注目されるべきであろう。「共同」造語者というよりもむしろ、「名目的」造語者アプトに対する「実質的」造語者とするべきかもしれない。

これに対して、アプトは一七六四年十一月八日付で次のように返信している。「Empfundは斥けられました。私はsensationには感覚を、sentimentにはEmpfindnisを選びました。感触はしばしば両義性にさらされています」(69)。翌年に出版された著作では、最終的に次のような記述となった。

> 感覚はsensationと、Empfindnisはsentimentとみなされよう。……感覚は生き生きと、しかし混乱して、事柄をわれわれに関係づける、感官を介して。Empfindnisは同じことを、想像を介して行う。前者の場合、事柄はわれわれに現前しているようにかかわる。後者の場合、たとえそれが現前しているとしても、むしろ像がそれを行う。（Abbt 1765, 156f.）

要するに、アプトはメンデルスゾーンらの代案を受け入れなかったのである。彼は、「感触」は両義的である、すなわち、「触覚」という意味と「感情」という意味とがある（このことを本稿では「感触」という日本語で表現した）[21]ため、頑なに採用を拒んだのである。しかし、原案に固執することもなく、候補に上ったEmpfindnisという語をちゃっかり採用してsentimentの訳とし、押し出されて宙に浮いた格好の「感覚」をsensationの訳にスライドさせた。こうして、独語の哲学的概念としてのEmpfindnisが成立した。メンデルスゾーンも最終的にこの措置

に納得したであろうことは、七〇年代の彼の議論が証している。

七　「輸入元」としてのフランス感覚主義

以上のように、独語の哲学的概念としてのEmpfindnisは、仏語のsentimentの訳語として、「感覚（sensation）」と対になって、誕生した。だとすれば、次の問題は、フランスにおけるその「輸入元」はどこか、ということになろう。

メンデルスゾーンとアプトのやり取りにおいては、具体名は挙がっていない。挙がっているのは、テーテンスの『試論』においてである。そこでは、すでに言及したボネと並んで、エルヴェシウス、コンディヤック、サーチ（本名アブラハム・トゥッカー）の名が、感覚から人間の本性を説明しようとした「感覚主義者」[22]として（ライプニッツ・ヴォルフと対比的に）挙げられている（PhV, I 4）。メンデルスゾーンとアプトにおいても、彼らを「輸入元」と仮定してよいであろう。以下ではこの仮説を、サーチ（テーテンスが参照しているその著『自然の光を求めて』は一七六八年出版）を除外してフランスに限定して、検討したい。

この三人の著作は、すべて一八世紀中に独訳されている。しかも、エルヴェシウスの『精神論』（一七五九年）の独訳はアプトの『功績について』以前（六〇年）に、ボネのものも『試論』以前（七〇年）に出版されている（さらに、それぞれゴットシェートとシュッツという名のある思想家が翻訳している）。だとすれば、ドイツへの「輸入」は、これら既存の独訳に従っただけなのではないのか。そうではないのである。以下、独訳順に具体的に見ていこう。仏語原文から引用・訳出するが、sentimentとsensationに対応する独訳語も併せて示すことにする。

エルヴェシウスの『精神論』第四講第二章では、次のように言われる。

われわれにおいて最大の情念が呼び覚まされる瞬間は、通常sentiment（Empfindung）と呼ばれるものである。情念ということで理解されるのは、単一の種類のsentimentの連続性にほかならない。男性の女性に対する愛は、この女性だけに対する欲望とsentimentの持続にほかならない。／こうした定義が与えられれば、今後sentimentをsensation（Gefühl der Sinne / sinnliches Gefühl）から区別し、いかなる観念がこれら二つの言葉に相互に結びつかねばならないかを知るためには、二種の情念があることを想起する必要がある。一つは、自然から直接与えられたものであり、飲食などの自然的欲望ないし欲求のようなものである。もう一つは、自然から直接には与えられないがゆえに社会制度を前提とする、本来は作られた情念でしかないものであり、野心、自尊心、奢侈心などである。これら二種の情念に従って、二種のsentimentを区別しよう。一つは、前者の情念すなわち自然的欲求と関係し、sensationという名を持つ。もう一つは、作られた情念と関係し、とりわけsentimentの名の下に知られている。（Helvétius 1758, 492 = Helvétius 1759, 494）

sensationもsentimentも、どちらも「情念」であるが、前者が「自然的」なものであるのに対して、後者は「社会制度を前提とする」「作られた」ものである、という内容である。これは、これまで検討したドイツ思想のどこにも見られなかったものではないか。独訳では、前者が「感覚」、後者が「感官の感触」ないし「感性的感触」と訳されており、メンデルスゾーンがアプトに示した対案はこれに準じたものと言えるが、内容がまったく伴っていない。「内容的輸入元」としては失格である。

次に、ボネの『分析的試論』（§一九九）である。

そして、どんな種類のsensation（Empfindung）も、それ固有の器官ないし繊維をもつのだから、あるsensation

のsentiment（Empfindnis）が別種のsensationをわれわれに与えることはできない。その鼻がナデシコの香りに適した繊維をもたないような人間は、この香りのsentimentを得ることはできないであろう。（Bonnet 1760 146f. = Bonnet 1770-71, I 145）

「固有の器官ないし繊維をもつ」[23] sensationが香りなどのsentimentを生む、という内容である。前者は、メンデルスゾーンおよびアプトの記述とおおむね一致する。しかし、彼らが「香り」をsentimentに含めるだろうか。独訳はアプトの著書と同じであるが、前述のようにアプトの著書の方が先に出ているため、むしろアプトの術語を独訳に際して用いた、というのが実情であろう。なお、前に見たテーテンスの「ボネ氏はEmpfindnisである感覚をsensationと呼んだ」という記述は、この引用と照合すれば、誤りであることが分かる。「あるsensationのsentiment（Empfindnis）」の中間部を省いて引用したのではないだろうか。

最後に、sensationそのものを題名に掲げるコンディヤックの『感覚論』（一七五四年）を見よう。同書において、「感覚」は端的に「感覚器官」すなわち視覚・聴覚・味覚・嗅覚・触覚という五官の総称であるが、大理石の立像に五官を一つ一つ付与していくとどうなるか、という、きわめて今日的な思考実験が繰り広げられる。その冒頭（第一部第一章§八-九）、立像に嗅覚のみを付与するくだりで、次のように言われる。

したがって、立像には感じる仕方が二つあるが、その相違は、一方は実際のsensation（Empfindung）に関係し、他方は今はないがその印象は続いているsensationに関係する、というだけである。二つの在り方を自らに作用する対象が存在することや、自らも器官を持つことさえ知らない立像は通常、かつてあったものを弱く感じ現にあるものを生き生きと感じる実際のsensationから、sensationの想起を区別する。／「通常は」とい

うのは、想起は必ずしも弱いsentiment（Gefühl）でないし、感覚自体も生き生きとしたsentimentではないからである。というのも、記憶が存在の仕方を多くの力によって跡づけ、逆に器官が軽い印象しか受けない場合は常に、実際のsensationのsentimentは、もはや存在しないsensationの想起ほどには生き生きとしていないだろうからである。（Condillac 1754, 26-28. = Condillac 1791, 18f.）

コンディヤックは、sensationを現在の対象にかかわるものと「想起」によって過去の対象にかかわるものとに区別し、後者の一部すなわち「生き生きとした」ものをsentimentと呼ぶ。後者の記述は（同書全篇を通じて）必ずしも明確・具体的ではないが、内容的にはメンデルスゾーンおよびアプトのそれと（「想起」という契機を除けば）最も重なる。ちなみに、彼らおよびテーテンスが参照しえなかった独訳（九一年）では、sensationが「感覚」、sentimentが「感触」と訳されており、アプトの用法が必ずしも定着したわけではなかったことを物語っている。

以上のように見てみると、一口に「感覚主義」と言っても、少なくともsensationとsentimentとの区分・関係に関する限り、一枚岩ではまったくない。以上の三者の中では、コンディヤックの区分がメンデルスゾーンおよびアプトのそれと内容的には最も近いが、決して唯一絶対の「輸入元」ではない。彼らは、「感覚主義」を大まかにつかんだ上で、既存の独訳とは独立に独語に置き移そうと試行錯誤した、というのが実情であろう。

八　おわりに

以上の考察をまとめ、sentiment - sensationという仏語の対概念の独訳を一覧にすると、次のようになる（同系統の語には同じ傍線を付す）。

	sensation	sentiment
エルヴェシウス（一七五九年）	Gefühl der Sinne / sinnliches Gefühl	Empfindung
アプト（草稿、一七六四年八月八日。Cf. JubA, XII/1 276）	Empfund	Empfindung
メンデルスゾーン（提案、一七六四年八月下旬）	Fühlung	Empfindung
アプト（著作、一七六五年）	Empfindung	Empfindnis
ボネ（一七七〇年）	Empfindung	Empfindnis
エーベルハルト（一七七六年）	Empfindung	Empfindnis
テーテンス（一七七七年）	Empfindnis / Rührung	das Empfundene
コンディヤック（一七九一年）	Empfindung	Gefühl

このように、一八世紀のEmpfindnisは、大枠ではフランス感覚主義のsentimentの独訳であり、sensationの独訳である「感覚」と対をなす、と結論しうる。[24]「感覚」が外的刺激を物理的中立的に受容するものであるのに対し、Empfindnisは快ないし不快などの価値判断を含んだ「感情」（ないし「感傷」）である。しかし、これと二〇世紀のフッサールのそれとの間には、フッサールにおいても「感情」という契機は認められはしたが、大きな断絶がある。フッサールは一八世紀のEmpfindnis概念を（いかにして）知りえたかの解明は、今後の課題としたい。

このように捉えるならば、Empfindnisはカントが美的判断の基礎に据えた「快および不快の感情」の「前身」と見ることができよう。三〜五節では「カントの心的能力の三分法に（最も）影響を与えたのは誰か」という問いを

考察の導きの糸としたが、それによって明らかになったのは、「人間の心的能力は何種類に還元できるか」という問いが（アカデミーが――「認識と感覚という二能力説は妥当か」という変形ではあれ――懸賞課題に掲げるほど）当時の思想界の一大論争点であったこと、しかし、大まかな傾向としては、根本能力の数を増やし細分化する方向に向かっていったこと、である。[25] ここで増やされ細分化された能力が広義の「感性」であり、その独自性を認めて哲学的考察の対象にする営みが「美学」にほかならない。『判断力批判』は、その（一応の）到達点である。たしかに、それに先立ってバウムガルテンにおいてすでに「美学」は哲学の一学科として誕生してはいた。しかし、彼は『美学』を当初計画の一／六（それでも§九〇四に及ぶが）も執筆しないまま病に倒れた。彼の「美学」は、「宣言」の域を出ないものだったのである。そこから『判断力批判』までは、この「宣言」を名実ともに具体化する歴史であり、Empfindnis概念は、その（「名」の側の）一コマをなすものと見ることができる。

しかし、カントはこの概念を採用せず、アプトがその両義性ゆえに忌避した「感触（感情）」を採用した（『判断力批判』翌年に出されたボネの独訳がsentimentを「感触」と訳しているのも、この影響下にあるものと考えられる）。ここにおいて、それまでのEmpfindnis概念の歴史は、いわば塗りつぶされてしまった、と言える。[26] 超越論的観念論者カントの眼中に「触覚」という経験的感官は入っていなかったから、ということではない。実際、バウムガルテンの『形而上学』中の「経験的心理学」の箇所を教科書として講じた[27]（特に一七七〇年代前半の）人間学講義では、彼は「触覚」をしばしば論じている（AA, XXV 45; 273）。しかし、徐々にGefühlを（快および不快の）「感情」に限定し、「触覚」にはSinn der Betastungという語を充てる（cf. VII 154）など、術語の両義性を排除しながらその哲学体系を構築していく。「『感情』は『触覚』に基づく」などという比ゆ的な議論は認めない、というわけである。しかし、「判明」ではなく「混乱」した「生き生きとした」事象（＝バウムガルテンの「感性的」の定義）を語るのに、そのような（今日の学術的視点から見れば当然とも言える）態度は適切だろうか。実際、その議

論が比ゆ的だと批判されたヘルダーは、そのようにカントを再批判したのである。[28] そのような観点からカントの美学を相対化し、その前史を否定し去られるべきものとしてではなく、バウムガルテンの「美学」樹立宣言を具体化する試行錯誤の歴史として肯定的に見ること、このことを、Empfindnis概念のささやかな歴史を記述した本稿を通じて、主張したい。[29]

文献

（著者姓と出版年［または略号］で同定し、該当箇所の巻数をローマ数字で、頁数をアラビア数字で記す。例外はその都度記す。訳出に際して邦訳のあるものは参照したが、本文との関係上、訳文は筆者のものである）

Abbt, Thomas, 1765. Vom Verdienste, Berlin.

Bonnet, Charles, 1760. Essai analytique sur les facultés de l'âme. Kopenhagen (1770-71. Analytischer Versuch über die Seelenkräfte. Übers. und mit einigen Zusätzen vermehrt von Christian Gottfried Schütz. Bremen/Leipzig.).

Condillac, Étienne Bonnot de, 1754. Traité des Sensations. Paris (1791. Abhandlung über die Empfindungen. Übers. von J[oseph]. M[aria]. Weisseggeer, Wien. 1948.『感覚論』加藤周一・三宅徳嘉訳、創元社)．

Eberhard, Johann August, 1776. Allgemeine Theorie des Denkens und Empfindens. Berlin.

Hamann, Johann Georg, 1955-79. Briefwechsel. Hg. von Walther Ziesemer und Arthur Henkel. Frankfurt am Main: Insel.

Helvétius, Claude-Adrien, 1758. De l'esprit. Paris (1759. Discurs über den Geist des Menschen. Übers. von Johann Christoph Gottsched. Siegert/Leipzig/Lignitz).

Herder, Johann Gottfried, 1985-2000. Werke in zehn Bänden. Hg. von Günter Arnold et.al., Frankfurt am Main: Deutscher Klassiker.

Husserl, Edmund, 1950- . Husserliana. Gesammelte Werke, Haag: Nijhoff (= Hua) (2001-09.『構成についての現象学的諸研究』(『イデーン―純粋現象学と現象学的哲学のための諸構想―』Ⅱ) 立松弘孝・別所良美訳、みすず書房。2010.『現象学と諸学問の基礎』(『イデーン―純粋現象学と現象学的哲学のための諸構想―』Ⅲ) 渡辺二郎・千田義光訳、みすず書房。2012-15.『間主観性の現象学』浜渦辰二・山口一郎監訳、ちくま学芸文庫)．

Kant, Immanuel, 1902- . Gesammelte Schriften. Hg. von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften. Berlin: Gruyter (= AA) (1999-2006.『カント全集』全22巻、岩波書店).

Mendelssohn, Moses, 1971- ([1]1929-). Gesammelte Schriften. Jubiläumsausgabe. ND. Stuttgart-Bad Cannstatt: frommann-holzboog. (= JubA)

Tetens, Johann Nikolaus, 2014. Philosophische Versuche über über die menschliche Natur und ihre Entwicklung. Kommentierte Ausgabe. Hg. von Udo Roth und Gideon Stiening. Berlin: Gruyter (= PhV、原著の頁数).

Böhme, Gernot, 2001. Aisthetik. Vorlesungen über Ästhetik als allgemeine Wahrnehmungslehre. München: Fink (2005.『感覚学としての美学』井村彰他訳、勁草書房).

Frank, Manfred, 2002. Selbstgefühl. Eine historisch-systematische Erkundung. Frankfurt am Main: Surhkamp.

Hölscher, Uvo, 1885. Urkundliche Geschichte der Friedrichs-Universität Bützow. In: Mecklenburgische Jahrbücher 50, SS. 1-110.

小林信之 2015.「ふれることについて—触覚の現象学—」『早稲田大学大学院文学研究科紀要（第1分冊、哲学・東洋哲学・心理学・社会学・教育学）』第60巻、21-36頁。

小田部胤久 2007.「ヴォルフとドイツ啓蒙主義の暁」『理性の劇場』（『哲学の歴史』第7巻）中央公論新社、41-74頁。

Rosenkranz, Karl, 1840. Geschichte der Kant'schen Philosophie. Leipzig.

佐藤慶太 2015.「テーテンス『人間本性とその展開についての試論』とカント」『香川大学教育学部研究報告第I部』143号、121-138頁。

杉山卓史 2006.「ベルダーの共通感覚論—共感覚概念の誕生—」『美学』第225号、1-14頁。

———— 2012.「美と倫理の結合子としての虚構—メンデルスゾーンの感覚概念をめぐって—」『美学芸術学研究』第30号、45-72頁。

———— 2013.「ベルダーの「感覚」論—『認識と感覚』の同時代的位置—」『ベルダー研究』第18号、43-65頁。

辻麻衣子 2018.「テーテンス・ルネサンスとカント—「三重の総合」に見る経験心理学への態度—」『日本カント研究』第19号、73-87頁。

Welsch, Wolfgang, 2003 (1990). Ästhetisches Denken. 6., erweiterte Aufl. Stuttgart: Reclam（1998.『感性の思考―美的リアリティの変容―』小林信之訳、勁草書房）.
Zahavi, Dan, 2003. Husserl's Phenomenology. Stanford（CA）: Stanford University Press（2003.『フッサールの現象学』工藤和男・中村拓也訳、晃洋書房）.

注

（1）Cf. e.g. Welsch 2003; Böhme 2001.

（2）本節の記述は、小林 2015に示唆を受けている。

（3）「感覚」については、杉山 2012においてメンデルスゾーンに即して、杉山 2013においてヘルダーに即して、それぞれ検討を加えた。

（4）小学館独和大辞典。

（5）それぞれ立松弘孝・別所良美訳、渡辺二郎・千田義光訳、浜渦辰二・山口一郎監訳。その他、二次文献では「感覚感」（Zahavi 2003. 工藤和也・中村拓也訳）など。

（6）しばしばEmpfindnisは「触覚（Tasten）」と結びついてTastempfindnisという形で用いられる（IV 150; V 10; XIV 283）が、五官のそれ以外の感官と結びつくことはない。

（7）並行箇所として、『デカルト的省察』における次の箇所を参照。「自然における自分固有なものと捉えられた物体のなかに、私は唯一独特の仕方で私の身体を見出す。これは、単なる物体ではなくまさに身体であるような唯一のものであり、私の抽象的な世界の層の内部にあって、私が経験によって……感覚の場をそれに帰する唯一の客観であり、私がその『うちで』直接に『自分の思い通りにでき』、特にそのそれぞれの『器官』のうちで支配している唯一のものである。私は手で運動感覚的に触れることで知覚し、同様に眼で見ることで知覚し、等々と知覚し、常にそのように知覚することができる。その際、これら器官が持つ運動感覚は、『私はする』という仕方で経過し、私の『私はできる』に従うことになる。……このことが可能になるのは、私が一方の手『によって』他方の手を知覚し、手によって目を知覚する、といったことが『できる』ということを通じてである」（I 128）。

（8） Cf. 辻 2018.

（9） 詳しくは以下の通り。「感触は魂の変様可能性ないし感受性と、自らの内で新たな変化を単に感じ取ることを把握する。表象力と思考力が、まとめて知性に属し、感触と知性に比せられる残りの能力が、最後の活動力（意志）という名で呼ばれる」（ibid.）。

（10） 以下の箇所も参照。「およそ自然の多様を人為的に区分することは、普通は欠陥をもつし、もたざるをえない」（26）。

（11） Rosenkranz 1840, 65.

（12） Cf. Frank 2002, 200ff.; 杉山 2013, 49f.. これに対し、佐藤 2015は「『試論』で取り扱われるそれぞれの認識能力の間には、一定の質的差異が設定されている」（124）と見ている。

（13） さらに注9も参照。

（14） とはいえ、ここでも「感触という語は、今ではほとんど感覚という言葉と同じくらい拡張された範囲を持つに至った」（167）と、差異化に苦慮する様子がうかがえる。

（15） このような留保を付したのは、カントが誰の影響も受けずに独立に「第三の能力」を発見した、とする見解もあるからである。Cf. 杉山 2012, 70（注（27））.

（16） すべて「感覚能力」という、「能力（Vermögen）」と結びついた形である。Empfindnisは、一度だけ「能力」と結びついて用いられている。

（17） 杉山 2012でも訳し分けていなかった。以下の考察は、旧稿に対する自己批判でもある。

（18） Cf. 杉山 2012.

（19） Cf. 小田部 2007, 67f..

（20） 『芸術文庫』は、メンデルスゾーンが友人のニコライ（Friedrich Nicolai, 1733-1811）およびヴァイセ（Christian Felix Weiße, 1726-1804）と創刊した雑誌。原題は「文芸における崇高なものと素朴なものについての考察」。

（21） この両義性を有効活用したのが、『言語起源論』（一七七二年）におけるヘルダーであった。Cf. 杉山 2006.

（22） テーテンス自身による命名ではなく本稿における。

（23） 当時は、細胞ではなく「繊維」が人体の基本構成単位と考えられていた。

(24) この「大枠」に唯一当てはまらないのがテーテンスである。口述筆記（cf. Hölscher 1885. 71）の過程での誤りであろうか。

(25) まとめれば、以下のようになろう。なお、本稿で扱わなかったものについては、杉山 2013を参照。

一能力説：ヴォルフ、初期ズルツァー、テーテンス、ヘルダー

二能力説（認識と欲求）：メンデルスゾーン（～六〇年代）、カント（～八七年）

二能力説（認識と感覚）：中後期ズルツァー

三能力説：エーベルハルト、メンデルスゾーン（七〇年代～）、カント（八八年～）

(26) 実際、一七九〇年代のEmpfindnis概念は、ヘルダーの『純粋理性批判のメタ批判』（一七九九年）等、旧哲学の立場からカントを批判する際に用いられる。Cf. Herder 1985-2000, VIII 387.

(27) バウムガルテンの『形而上学』の初版は一七三九年であるが、カントが教科書に用いたのは、主要な術語に独訳が付された五七年刊の第四版である。

(28) 注26参照。

(29) 本稿は、二〇一九年十一月三日に開催された京都哲学会公開講演会における同題の講演に基づく。特定質問者・小林信之氏をはじめ、貴重な質問・コメントをくださった聴衆の方々にお礼申し上げる。さらに遡れば、本稿の内容は二〇一九年度前期開講の美学美術史学特殊講義で講じたものである。忌憚のない質問・コメントを寄せてくれた受講者諸君にも感謝したい。なお、本稿はJSPS科研費JP18K00126の助成を受けたものである。

（筆者　すぎやま・たかし　京都大学大学院文学研究科准教授／美学美術史学）

Eine kleine Geschichte des Begriffs vom „Empfindnis“

by

Takashi SUGIYAMA

Associate Professor of Aesthetics

Dieser Aufsatz versucht eine Geschichte des Begriffs vom „Empfindnis“ zu sukizzieren. Als ein dessen prominenten Benutzer in der modernen Philosophie gilt Edmund Husserl, der ihn gebrauchte, um eine lokalisierte und doppelte Art der Empfindung zu bezeichnen. Aber Husserl war kein erster, der ihn gebrauchte. Es ist schon in der zweiten Hälfte des 18. Jh. gebraucht. Dieser Begriff war eigentlich im Mitte der 1760er Jahre (bei Thomas Abbt und Moses Mendelssohn) gebildet, um den von den französischen Sensualisten (Claude Adrien Hélvetius, Charles Bonnet, Étienne Bonnot de Condillac usw.) gebrauchten Paarbegriff „sensation – sentiment“ in die deutschsprächige Philosophie einzuführen. Dabei ist „sensation“, der neutrale Akt des Empfindens, in die „Empfindung“ übersetzt, während „sentiment“, die Emotion mit dem positiven oder negativen Werturteil, ins „Empfindnis“. Dieser kam aber nach der 1790er Jahre außer Gebrauch, wie z.B. Immanuel Kant das Geschmacksurteil auf der „Gefühl der Lust und Unlust“ (statt des Empfindnisses) begründete. Diese kleine Begriffsgeschichte bringt die verborgenen Aspekte der Entwicklungsgeschichte der modernen Ästhetik von Alexander Gottlieb Baumgarten bis Kant ans Licht.